

新潟市環境部廃棄物施設課

「震災瓦礫処理説明会」から

本田 敏彦

岩手県大槌町から出た約三四万

トンの災害廃棄物の一部、六千三百トン（新田焼却場では一日最大一〇トン処理可能）の焼却の要請を県内五市が受けました。

新潟の西区新田焼却場での試験焼却説明会（九月八日土曜日、同所にて）に参加し、約二時間余の市環境部廃棄物施設課の「丁寧な説明」と参加者のたぐさんの「質疑」や「意見」をききました。

以下私なりの整理です。

《市の説明の概要》

①「なぜ広域（被災地外）処理なのか」の理由説明。

②木質チップからでる「放射能被曝の危険性」は無視できるとの理由説明。

③「焼却処理施設」と「埋立処分地」における試験的処理方法の説明。処理されて出てくる放射性物質の分別・測定方法と数値は公表する等々の説明。

（解説）木質チップ 倒壊した建物の柱材・角材等を選別、チップ化した

たものです。木質チップを燃やして出てくる放射性セシウム濃度は一キロ当たりで一〇〇ベクレル以下、「国際基準」内だから故に安全だという説明です。

市の資料は環境省の「東日本大震災により生じた災害廃棄物の広域処理の推進にかかるガイドライン」の抜粋です。

*説明の主要トーン

「今回受け入れる災害廃棄物は低レベル放射能（一キログラム当たりの線量百ベクレル以下）なので、住民の健康・安全を十分配慮して、その範囲内の安全な処理作業をする」でした。

この結論の補強の意味になるのか、「この低レベルの人工放射能の影響は、日常浴びている太陽などの自然放射能や食品中の放射性

物質と同じか、それ以下」また「ガンになるリスクは放射能被曝によるだけでなく生活習慣がよくない人でも高い」等の資料も出ました。その資料の出所は原子力安全・保安院や原発推進の電気事業連合会・国立ガン研究センターです。

これについて「原発安全神話を振りまいてきた原子力村の資料を使つての説明では『安全だ!』の結論ありきの試験焼却したい説明会だ」という参加者からの手厳しい声が飛びました。

《質疑・討論》

—「広域処理」の問題点—

*「現地処理が一番」の声

『「広域処理」の予算（税金）を被災地焼却炉増設にまづはふりむけ、地元の雇用が減つて困つている人たちの仕事確保にふりむける

べきでは」の意見に多くの人が共感しました。

（解説）一トン当たり六万円の広域処理費（処理費に四万円・輸送費二万円―宮城―東京間の例）―莫大な税金が投入されます。陸前高田の市長さんは現地の声として市内に「現地にがれき処理専門のプラントを作れば今の何倍のスピードで処理できる」といっています。

*「低レベル放射能汚染」は

無視できるのか

「汚染拡散は不可避の声」もたくさん出されました。「厚労省からは放射性セシウム濃度が一〇〇ベクレル以下の災害廃棄物しか受け入れないから安全だといわれている」との説明に、「なぜ危険でないのかの問いに答えていない思考ストップの説明」との批判がで

ました。処理方法への疑問も出ました。

処理作業中での放射性物質の大気中への拡散問題、廃棄物中の汚染物質の濃縮問題、放射性物質の移動問題には厳しい制限の法律がある、等々です。

（解説）百ベクレルとは一キログラムあたり、一秒間に有害な人工の放射能が百個も飛び出してくるという放射能の強さ＝量を示しています。

厚労省と市の立場は、それでもこの線量は人の健康に対するリスクは無視出来るというのです。この基準はどこが決めたのが問題です。この基準は原水爆開発・原発推進の主要大國を核とする国々の原子力の平和利用政策を擁護しつづけ、長期にわたつて人間の体内で「晩発性（放射能）障害」の被害を与え続ける低レベル放射能の影響の問題に深入りし

ないでできた国際原子力機関・IAEAが決めた安全指針―「規制免除レベル」クリアランスレベル」なのです。「内部被ばく問題」は世界各国の学者間では以前から論じられています。ドイツは「原発依存政策見直し」に動きました。

日本では科学的な検証ができないとの理由で法的規制が無く、「安全性より人間社会への便利性が大事だ」とする財界・政府の後押しをする学者・マスコミのキャンペーンにより国民は長らく目をふさがれ、恐ろしい真実が見えなかつたようです。

「バグフィルター」は

役立たないのでは

市は「焼却炉で焼却後、不燃物の埋め立て処理、溶解処理をするのだが、細かい煤塵は煤塵除去装置（バグフィルター）で取り除き、

その飛灰は不燃物（主灰）と共にきちんと埋立施設に埋める」と説明。参加者から「作つた会社がバグフィルターは放射能を除去することを想定してつくつた物でない（除去できる保証のない装置）」と回答しているのを知らないのか」の声がでました。

（解説）放射性物質の大きさはミリの六〇億分の一です。想像できないくらい小さなものだそうです。

この放射性物質が人間の体内に空気や食物等と共に入り、六〇兆個もある人間の細胞（たくさんの分子でつくられているが細胞の一つなら普通の顕微鏡の二千倍の倍率で見える）

の中で、核分裂を起こして細胞の中の生命設計図―（DNA）デオキシリボ核酸）のどれかを放射線（ α 線、 β 線、 γ 線）でうちこわしたり、細胞膜をきずつけ人体各所に放射能障

害を短・長期的に引き起こすのだそうです。特に内部被ばく障害は原爆投下、核実験、各国の原発被害で世界中にまき散らされた放射能災害で長い年月かけて発病しています。発病数の統計数字の増加で疫学的にわかつて来ているそうです。

* 「なぜ危険なのか」に

触れない説明会

厚労省や市側の「なぜ広域処理なのか」の説明理由は「被災地で処理できないからだ」だけです。これでは放射能汚染被害を心配している住民はなにか隠された事情があるのでは、と疑います。

「災害廃棄物を全国に拡散して処理するこつとした取り組みは、政府・財界の（今のところ心配ない）「原発安全神話定着作業」の第二段階―全国キャンペーンではないか」の

声が出てもおかしくはないと思っ
てしまいました。

*「低レベル放射能」に

目をつむる説明会

「災害廃棄物に市民が出した一
般ゴミをたくさん混ぜて燃やすと
レベルが下がる」との説明があり
ました。そのやり方に「焼却量を
増加しても持ち込まれた災害廃棄
物の元の量が同じだから、焼却総
量に対する災害廃棄物のパーセン
テージの数値は計算上だけへった
だけだ」と指摘され、「持ち込ま
れた被災地放射性物質のパーセン
テージ数値の操作で放射能は安全
と思わせるごまかし」との失笑が
会場に沸きました。

*「ペトカウ効果」を

知らなかった市側

質問があった「ペトカウ効果」
とはカナダの原子力公社研究所の
ペトカウ博士の研究でわかった生
体レベル、細胞レベル、さらに、
その分子レベルでの低線量放射能
による影響を言うのです。

この研究により細胞の分子のレ
ベルでの「低レベル放射能による
晩発性（放射能）障害」の原因追
跡が本格化して、人工放射能は放
射能レベルがどんなに低くとも
（むしろ低くければ低いほど）、危
険な働きをするのだという事がはっ
きりしてきているようです。

この研究から得た知見で災害廃
棄物は安易に引き受けられないこ
とがよく見えてきました。新潟市
も市民も、もつともつと勉強する
ことが必要です。「上意下達」は
だめですね。

（解説） この質問は「人間と環境へ

の低レベル放射能の脅威」（あけび
書房）、ラルフ・グロイブと他アー
ネスト・スターングラス著、肥田舜
太郎・竹野内真理子訳（¥3800）
の一二九頁から一四三頁の著述の内
容を参照しての質問です。市の説明
者にも紹介されました。詳細は略し
ます。

訳者の軍医だった九〇歳を超える
肥田さんは広島で被爆直後から被爆
者救済活動をし、以後、原爆後遺症
（放射能による内部被ばくの晩発性
放射能障害）で今なお苦しんでいる
広島・長崎の患者さんに寄り添って
きた医師であり、この問題の研究で
は日本の第一人者です。「原爆投下」
が戦争を終わらせたと思っている欧
米や他の地域で「広島原爆の外部
被ばく・内部被ばくの実態を告発」
する講演活動しています。

氏は原爆を広島・長崎に投下した

アメリカが、「低レベル放射能被害」の事実を世界中に知られないように原爆被爆者のデータを持ち去り封印し、アメリカに物を言えない日本政府もこの政策に追従し原子力利益共同体の「原子力の平和利用」のキャンペーンで「原子力安全神話」を振りまいてきたと語ります。

—追記—

「ペトカウ効果」について

人の体は六〇兆個の細胞からなり、その一つ一つがヒトの遺伝子をもつ細胞核とそのまわりの細胞質それらを包む細胞膜で出来ています。

一ミリの六〇億分の一の放射能物質が空気・水・食べ物にまじって人体に入ります。その放射性物質が出す放射能の「恐ろしさ」を要約してみます。

*みなが知り始めたこと

細胞核に放射能が当たり、その中の生命設計図(DNA)のどこかを傷つけて「何百万年にもわたって(人類の)『種』の比較的優れた安定性(同書一四四頁七行)」に遺伝的障害を引き起こす恐ろしさ。

*誰もがよく知らなかったこと

「ペトカウ効果」の恐ろしさ
細胞膜が放射能で破壊される事からくる障害を言います。少量で慢性的な放射線照射は高い線量の短時間照射より(細胞膜への)影響が大きく(同書一三〇頁)、被害も大だそうです。

放射線は細胞質内の酸素分子にぶつかって毒性の強い酸素—活性酸素(フリー・ラジカル)をつくり、これが細胞膜を次々と酸化する。放射線が強くて活性酸素が多

くできると、細胞質の中でお互いに衝突し合い非活性化し、無害になる。放射線が少ないとマイナスに荷電した活性酸素は細胞質の中で動きやすくなり、細胞膜までたどり着いて、高線量の時より一〇〇倍も一〇〇〇倍も細胞膜を傷つける。そして、また生物組織にどのような病理学的影響があつて障害が誘発されるかは解つてはいないが、発がん性(白血病等)、免疫力低下でおきる疾患(エイズやガンなど)、感染症・老化そして突然変異ウイルスによる世界的な伝染病がおきる可能性等に関連があると研究者たちは指摘しています。

以上が一九五〇年代からの核保有国による砂漠や太平洋での核実験や先進諸国の原子力発電所が半世紀近く大気・河川・海へ垂れ流した核廃棄物の放出状況やチエル

ノブイリ等の原子炉の重大事故をも見極めての研究です。

「ベトカウ効果」の発見を

みんなが知らなかった理由

「ベトカウ効果」の発見は四〇年前の一九七二年のことです。

人類滅亡につながる「放射能汚染拡大」を防ぐ研究に道を拓き、ノーベル賞がもらえそうなこの発見は、なぜ多くの人に知らされなかったのでしょうか。それは原爆や原発の製造で巨利を得てきた大企業とそれに後押しされた政権党・政府がこの発見を軽視（無視）してきたからでした。

私はこの人たちは「ベトカウ効果」の恐ろしさを国民に伝えると「原爆も原発も作るな」の世論が全世界に広がり、これまでの特権的立場を失うことは間違いないと

思ったのではないかと推察しました。みなさんはどうですか。

自分だけの利益のため他人に犠牲を負わせてきた人達は、自分の家族・子孫がこの「地球レベルの放射能汚染状況」から逃げられないのだということが解らないようです。とても悲しいことです。

人類は「子孫が生き残って、今後、繁栄してゆけるのか」という深刻な問いに正面から向き合い、考える時代がきています。

——まとめにかえて——

*「原発反対の理由」を訴え続けたゆえに今までアウトサイダー視されていた学者たちの出版物が「福島原発」事故が起き、初めて出回りだし、国民の多くはいまはじめて「原発」の恐ろしさを学びはじめています。私もその一人で

した。

*「原発利益共同体」Ⅱ「原子力村」が出している新聞・テレビへの巨額な広告費や学術研究費を受け取って真実を目をつむったマスコミやジャーナリストや御用学者たちの罪は重く思いました。彼らは断罪に値します。

*市民たちが独り立ちして学び合い、得たその情報を交流し、生体験でうらづけ、練り上げて、共に手をつないで行動してゆく時代がきていることを改めて強く思うことが出来ました。各地で声をかけ合って「原発」勉強の輪をひろげ、子や孫たちの新しい未来を紡ぎ合いましょ。

(ほんだとしひこ・研究所理事)